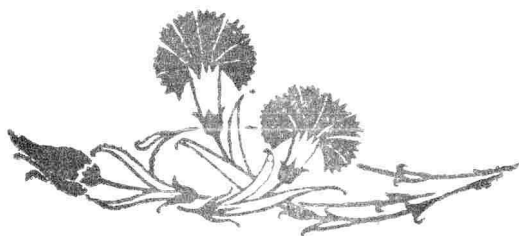


佐藤春夫集

現代文豪名作全集



河出書房

集 夫 春 藤 佐

現代文豪名作全集

第十八回配本

昭和二十八年十一月十五日 初版印刷
昭和二十八年十一月二十日 初版發行

定價 二八〇圓
地方定價 二九〇圓

著 者 佐 藤 春 夫

編 集 者 吉 田 精 一

發 行 者 東 京 都 千 代 田 區 神 田 小 川 町 三 八
河 出 孝 雄

印 刷 者 東 京 都 品 川 區 大 井 寺 下 町 一 四 三 〇
小 田 茂 作

發 行 所

東 京 都 千 代 田 區
神 田 小 川 町 三 八

株 式

會 社 河 出 書 房

電 話 神 田 (25) 三 一 七 四 番

本 製 田 岸 ・ 刷 印 本 日 東

目次

西班牙犬の家	三
戦争の極く小さな挿話	九
田園の憂鬱	一三
お絹とその兄弟	七七
雉子の炙肉	九六
星	九九
佗しすぎる	一一〇
一夜の宿	一四九
旅びと	一五
賣笑婦マリ	一七七
窓展	二〇九

女誠扇綺譚	二六
F・O・U	二四四
陳述	二六六
別れざる妻に與ふる書	二八八
觀潮樓附近	三〇九
戰國佐久	三四三
殉情詩集	三六〇
我が一九二二年	三七二
魔女	三七八
年譜	三六五
解説	吉田 精一

佐藤春夫集

西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人の爲めの短篇)

フラテ(犬の名)は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところで私を待つてゐる。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論大多數の人間などよりよほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思ひもかけぬやうなところへ自分をつれてゆく。で近頃では私は散歩といへば、自分でどこへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めて居るやうなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩かう。そこで私はそこを曲る。その細い道はだらだら坂道で、時々ひどく曲りくねつて居る。おれはその道に沿つて犬について、景色を見るでもなく、考へるでもなく、ただぼんやりと空想に耽つて歩く。時々、空を仰いで雲を見る。ひよいと道はたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の先で匂うて見る。何といふ花だか知らないがいい匂である。指で摘んでくるくるまはし乍ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立ちどまつて、首をかしげて、私の目の

中をのぞき込む。それを欲しいといふ顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅いで見て、何だ、ビスケットぢやなかつたのかと言ひただけである。さうして又急に駆け出す。

こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いてゐるうちに我我はひどく高くへ登つたものに見える。そこはちよつとした見晴で、打開けた一面の畑の下に、遠くどこの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらくそれを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとするれば、一たい何處なのであらう。私は少し腑に落ちぬ氣持がする。しかし私はこの邊一帶の地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが、それはそれとして、さて後の方はと注意して見ると、そこは極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなつて居るらしく、どこも一面の雑木林のやうである。その雑木林は可なり深いやうだ。さうしてさほど太くもない澤山の木の幹の半面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、樺や樫や栗や白樺などの芽生したばかりの爽やかな葉の透間から、煙のやうに、また匂のやうに流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向との加減が、ちよつと口では言へない種類の美しさである。私はこの雑木林の奥へ這入つて行きたい氣持になつた。その林のなかは、かき分けねばならぬといふほどの深い草原でもなく、行かうと思へば譯もないからだ。

私の友人のフラテも同じ考へであつたと見える。彼はうれ

しげにずんずんと林の中へ這入つてゆく。私もその後に従うた。約一町ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違ふやうな足どりになつた。氣らくな今までの漫步の態度ではなく、織るやうないそがしきに足を動かす。鼻を前の方に突き出して居る。これは何かを發見したに違ひない。兎の足あとであつたのか、それとも草のなかに鳥の巢でもあるのであらうか。あちらこちらと氣ぜはしげに行き來するうちに、犬はその行くべき道を發見したものらしく、眞直に進み初めた。私は少しばかり好奇心をもつてその後を追うて行つた。我我は時時、交尾して居たらしい梢の野鳥を駭かした。

斯うした早足で行くこと三十分ばかりで、犬は急に立ちどまつた。同時に私は潺湲たる水の音を聞きつけたやうな氣がした。(一たいこの邊は泉の多い地方である) 犬は耳を痾性らしく動かして二三間ひきかへして、再び地面を嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思つたよりもこの林の深いのは少しおどろいた。この地方にこんな廣い雑木林があらうとは考へなかつたが、この工合ではこの林は二三町歩もあるかも知れない。犬の様子といひ、いつまでも續く林といひ、私は好奇心で一杯になつて來た。かうしてまた二三十分ほど行くうちに、犬は再び立ちどまつた。さて、わつ、わつ! といふ風に短く二聲吠えた。その時までには、つい氣がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つ人の住家があらうとは、それが炭焼き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭といふ風なものはない様

子で、また唐突にその林のなかに雜つてゐるのである。この「林のなかに雜つて居る」といふ言葉はここでは一番よくはまる。今も言つた通り私はすぐ目の前でこの家を發見したのからして、その遠望の姿を知るわけにはいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考へて見てさほど遠くから認め得られようとも思へない、近づいての家は別段に變つた家とも思へない。ただその家は草屋根であつたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣が違ふ。といふのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風の造へ方なのである。ここから入口の見えないところを見ると、我我は今多分この家の背後と側面とに對して立つて居るものと思ふ。その角のところから二方面の壁の半分づつほどを覆うたつたかづらだけが、言はばこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを具へしめて居る裝飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありさうな家なのである。私は初めこれはこの林の番小屋でないかしらと思つた。それにしても少し大きすぎる。又わざわざこんな家を建てて番をしなければならぬほどの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。兎も角も私はこの家へ這入つて見よう、道に迷うたものだと言つて、茶の一杯ももらつて、持つて來た辨當に、我我の空腹を満さう。と思つて、この家の正面だと思へる方へ歩み出した、すると今まで目の方の注意によつて忘れられて居たらしい耳の感覺が働いて、私は流れが近くにあることを知つた。さきに潺湲たる水聲を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであらう。

正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面して居た。ただこへ来て一つの奇異な事にはその家の入口は、家全體のつり合ひから考へてひどく贅澤にも立派な石の階段が丁度四級もついで居るのであつた。その石は家の他の部分よりも、何故か古くなつて所所苔が生えて居るのである。さうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲くのであらうと思へる紅い小さな薔薇の花が、わがもの顔に亂れ咲いて居た。そればかりではない、その薔薇の叢の下から帯のやうな幅できらきらと日にかがやきながら、水が流れ出て居るのである。それが一見どうしてもその家のなかから流れ出して居るとしか思へない。私の家來のフラテはこの水をさも甘さうにしたたかに飲んで居た。私は一瞥のうちこれらのもを自分の瞳へ刻みつけた。

さて私は静に石段の上を登る。ひっそりとしたこの四邊の世界に對して、私の靴音は静寂を破るといふほどでもなく響いた。私は「おれは今、隠者か、でなければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ」と自分自身に戯れて見た。さうして私の犬の方を見ると、彼は別段變つた風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふつて居た。

私はこつこつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もない。私はもう一べん同じことを繰返さねばならなかつた。内からはやつぱり返答がない、今度は聲を出して案内を乞うて見た。依然、何の反響もない。留守なのかしら空家なのかしらと考へてあるうちに私は多少不氣味になつて來た。そつと足音をぬすんで——これは何の爲めであつ

たかわからないが——薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから脊のびをして内を見まはして見た。

窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黒ずんだ海老茶にところどころ青い線の見えどつしりとした窓かげがしてあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋のなかはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出來た大きな水盤があつてその高きは床の上から二尺とはないが、その眞中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやつぱり石であつた——は少ししめつぽく見える。このこぼれた水が薔薇のなかからきらきらと光りながら蛇のやうにぬけ出して來る水なのだらうといふことは、後で考へて見て解つた。私はこの水盤には少からず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから氣がついて居たものの、こんな異體の知れない仕掛まであらうとは豫想出來ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の内部を窺越しに觀察し初めた。床も石である。何といふ石だか知らないが、青白いやうな石で水で濕つた部分は美しい青色であつた。それが無雜作に、切出した時の自然のままの面を利用して列べてある。入口から一番奥の方の壁にこれも石で出來たフアイヤブレイスがあり、その右手には棚が三段ほどあつて、何だか皿見たやうなものが積み重ねたり列んだりして居る。それとは反對の側に——今、私がのぞいて居る南側の窓の三つあるうちの一番奥の隅の窓の下に大きな素木のままの裸の卓があつて、その上には

……何があるのだから顔をびつたりくつつけても硝子が邪魔をして覗き込めないから見られぬ。おや待てよ。これは勿論空家ではない、それどころか、つい今のさきまで人が居たに相違ない。といふのはその大きな卓の片隅から、吸ひさしの煙草から出る煙の絲が非常に静かに二尺ほど眞直に立ちのぼつて、そこで一つゆれて、それからだんだん上へゆくほど亂れて行くのが見えるではないか。

私はこの煙を見て今思ひがけぬことばかりなので、つい忘れて居た煙草のことを思出した。そこで自分も一本出して火をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ這入つて見たといふ好奇心がどうもおさへ切れなくなつた。さてつくづく考へるうちに、私は決心をした。この家の中へ這入つて行かう。留守中でもいい、這入つてやらう。若し主人が歸つて来たならば私は正直にわけを話すのだ、こんな變つた生活をして居る人なのだから、さう話せば何ともいふまい。反つて歓迎してくれないとも限らぬ。そこには今まで荷厄介にして居たこの繪具箱が、私の泥棒でないといふ證人として役立つであらう。私は蟲のいいことを考へて斯う決心した。そこでもう一度入口の階段を上つて、念の爲め聲をかけてそつと扉をあけた。扉には別に錠もおりては居なかつたから。

私は這入つて行くといきなり二足三足あとすぎさりした。何故かといふに、入口に近い窓の目向に眞黒な西班牙犬が居るではないか。頸を床にくつつけて丸くなつて居眠りして居た奴が、私の這入るのを見て狡さうにそつと目を開けて、のっそり起き上つたからである。

これを見た私の犬のフラテは、うなりながらその方へ進んで行つた。そこで兩方しばらくうなりつづけたが、この西班牙犬は案外柔和な奴と見えて、兩方で鼻面を嗅ぎ合つてから、向うから尾を振り初めた。そこで私の犬も尾を振り初めた。さて西班牙犬は再びもとの床の上へ身を横へた。私の犬もすぐその傍へ同じやうに横になつた。見知らない同性同士の犬と犬とのかういふ和解はなかなか得難いものである。これは私の犬が温良なのにも因るが主として向うの犬の寛大を賞識しなければなるまい。そこで私は安心して這入つて行つた。西班牙犬はこの種の犬としては可なり大きな體で、例のこの種特有の房房した毛のある大きな尾をくるりと尻の上に巻上げたところはなかなか立派である。しかし毛の艶や、顔の表情から推して見て、大分老犬であることは、犬のことを少しばかり知つて居る私には推察出來た。私の彼の方へ接近して行つて、この當座の主人である彼に會釋するために、敬意を表するために彼の頭を愛撫した。一體犬といふものは、人間がいちめ抜いて野良犬でない限りは、淋しいところに居る犬ほど人を懐しがるので見ず知らずの人でも親切な人には決して怪我をさせるものでないことを、經驗の上から私は信じて居る。それに彼等には必然的な本能があつて、犬好きと犬をいぢめる人とは直ぐ見わけけるものだ。私の考へは間違ひではなかつた。西班牙犬はよるこんで私の手のひらを舐めた。

それにしても一體この家の主人といふのは何者なのだらう。何處へ行つたのであらう。直ぐ歸るだらうか知ら。這入つて見るとさすがに氣が咎めた。それで這入つたことは這入

つたが私はしばらくあの石の大きな水盤のところまで佇立したまままで居た。その水盤はやつぱり外から見た通りで、高きは膝まで位しかなかつた。ふちの厚きは二寸位で、そのふちへもつてつて、また細い溝が三方にある。こぼれる水はそこを流れて、水盤の外がはをつたうてこぼれて仕舞ふのである。成程、斯ういふ地勢では、斯ういふ水の引き方も可能なわけである。この家では必ずこれを日常の飲み水にして居るのではなからうか。どうもただの裝飾ではないと思ふ。

一體この部屋一つきりで何もかも部屋を兼ねて居るやうだ、椅子が皆で一つ……二つ……三つ……きりしかない。水盤の傍と、ファイヤブレイスそれに卓に面して各一つづつ。何れもただ腰をかけられるといふだけに造られて、別に手のこんだところはどこにも無い。見廻して居るうちに私はだんだんと大膽になつて来た。氣がつくとこの静かな家の脈搏のやうに時計が分秒を刻む音がして居る。どこに時計があるのであらう。濃い樺色の壁はどこにもない。あああれだ。あの例の大きな卓の上の置時計だ。私はこの家の今の主人と見るべき西班牙犬に少し遠慮しながら、卓の方へ歩いて行つた。卓の片隅には果して、窓の外から見たとほり、今では白く燃えつくした煙草が一本あつた。

時計は文字板の上に繪が描いてあつて、その玩具のやうな趣向がいかにこの部屋の半野蠻な様子に對照をして居る。文字板の上には一人の貴婦人と、一人の紳士と、それにもう一人の男が居て、その男は一秒間に一度づつこの紳士の左の靴をみがくわけなのである。馬鹿馬鹿しいけれどもその繪が

面白かつた。その貴婦人の壁の多い筐べりのついた大きな裾を地に曳いた具合や、シルクハットの紳士の頬髯の様式などは、外國の風俗を知らない私の目にももう半世紀も時代がついて見える。さて可哀想なのはこの靴磨きた。彼はこの平靜な家のなか、その又なかの小さな別世界で夜も晝も斯うして一つの靴ばかり磨いて居るのだ。私は見て居るうちにこの單調な不斷な動作に、自分の肩が凝つて來るのを感じる。それで時計の示す時間は一時十五分——これは一時間も遅れて居さうであつた。机には塵まみれの本が五六十冊積み上げられてあつて、別に四五冊ちらばつて居た。何んでも繪の本か、建築のかそれとも坤圖と言ひたい様子の大冊な本ばかりだつた。表題を見たらば獨逸語らしく私には讀めなかつた。その壁のところに、原色刷の海の額がかかつて居る。見たことのある繪だが、こんな色はキスラアではないかしら……私はこの額がここにあるのを賛成した。でも人間がこんな山中に居れば、繪でも見て居なければ世界に海のある事などは忘れて仕舞ふかも知れないではないか。

私は歸らうと思つた。この家の主人には何れまた會ひに來るとして、それでも人の居ないうちに入込んで、人の居ないうちに歸るのは何だか氣になつた。そこで一層のこと主人の歸宅を待たうといふ氣にもなる。それで水盤から水の湧立つのを見ながら、一服吸ひつけた。さうして私はその湧き立つ水をしばらく見つめて居た。かうして一心にそれを見つづけて居ると、何だか遠くの音楽に聞き入つて居るやうな心持がする。うつとりとなる。ひよつとするとこの不斷にたぎり出

る水の底から、ほんたうに音楽が聞えて来たのかも知れない。あんな不思議な家のことだから何しろこの家の主人といふのはよほど變者に相違ない。……待てよおれは、リップ・ヴァ

ン・キンクルではないかしら。……歸つて見ると妻は婆になつて居る。……ひよつとこの林を出て、「K村はどこでしたかね」と百姓に尋ねると、「え？ K村そんなところはこの邊にありませんぜ」と言はれさうだぞ。さう思ふと私はふと早く家へ歸つて見ようと、變な氣持になつた。そこで私は扉口のところへ歩いて行つて、口笛でフラテを呼ぶ。今まで一舉一動を注視して居たやうな氣のするあの西班牙犬はちつと私の歸るところを見送つて居る。私は怖れた。この犬は今まで柔和に見せかけて置いて、歸ると見てわつと後から咬みつきはしないだらうか。私は西班牙犬に注意しながら、フラテの出て來るのを待兼ねて、大急ぎで扉をびつしやり音を立てて閉めて出た。

さて歸りがけにもう一べん家の内部を見てやらうと、脊のびをして窓から覗き込むと例の眞黒な西班牙犬はのつそりと起き上つて、さて大机の方へ歩きながら、私の居るのに氣がつかないのか、

「ああ今日は妙な奴に駭かされた」と、人間の聲で言つたやうな氣がした。はてな、と思つて居ると、よく犬がするやうにあくびをしたかと思ふと、私の隣きした間に、奴は五十恰好の眼鏡をかけた黒服の老人になり大机の前の椅子によりかかつたまま、悠然と口には未だ火をつけぬ煙草をくはへて、あの大形の本の一冊を開いて頁をくつて居るのであつた。

ぼかぼかとほんたうに温い春の日の午後である。ひつそりとした山の雜木原のなかである。

(大正五年十一月 「星座」)

戦争の極く小さな挿話

遼陽附近の戦であつた。別に大きな戦といふではなく、毎日いくらでもあるやうな奴である。

敵の機關銃が我々を覘つて居ると見える。

彈丸は我々の上や、眼の前や、肩の後で裂けた。

その降るやうな彈丸のなかを、第二塹壕から第一塹壕まで言ひやらなければならぬ非常な用事が、大隊長の頭に湧き出した。

さうして、その傳令に立つたのが内山といふ一等卒であつた。

彼は活潑に塹壕から飛上つた。

ここんで、這ふやうにして、十米突ばかり進んだと思ふと、彼は、ばつたりと、其場へ突き飛ばされたやうにのめつた。顔を地面へぶつつけるやうに。

「や、やられた。」と思つた——我々は塹壕のなかでそれを見た時に、併し直ぐ次の瞬間に、「いや、さうではあるまい、ひよつとすると、奴は躓いたのだらう」と考へ直した。といふのは、我々はおうこの頃には大ぶん戦争にも慣れて居て、撃たれて死ぬる人間を幾人も見て居る——尤も、内山の時の

やうに、はつきりと一ぶ始終を、たとへば見物席から舞臺を見るやうに細かに注視したことはなかつたけれども、それで撃たれて倒れる時には、皆一様に、一種くるりと向き直るやうな動作をするものである。これは彈丸の飛ぶ力のために人間が突きとばされることから起る現象であらうと、皆してよく語り合つたものだ。又、小銃でなく、大砲の砲彈がびゅうと伸びながら、人間の身體の近所を通ると、人間はその巻き起す風の爲に吹き倒されることもよくある。ところで、内山の今の倒れ具合は、そのどちらでもなかつた。今まで未だ一度も見たことのないやうな形である。

我々は鼻から上だけを地面から出して、内山の起きるのを待つて居た。勿論その間とても我々は銃を打つ手をほんやり休めて居たわけではない。ただこんな時には、妙に頭は頭、眼は眼、手は手、とそれぞれに動いて居るらしい。

さて、内山は急に起き上らない。撃たれたか？ 倒れて氣絶をしたか？

併し、しばらくすると、内山はやはり起き上つた。我々は吻とした。いくら戦争でも戦友の死んだのを見るより、生きて居るのを見た方がいいに決つて居る。

内山は起き上つた。けれども、身體を支へ起したきりで、つづいて驅け出しさうな様子はない。反つて、又しやがみ直して居るのだ。さうして少し體を我々の方へ振り向けるやうにした。それは何のためであつたか私には解らない。今でも解らない。それから空を見上げた。が直ぐまた頭をくつたりと下げた。

私は、どうしたのかと思つて、思はず體を延びだした機みに、頭上をかすめる彈丸のうなりで、反射運動的に首をすくめた、また前のとほり鼻までだけ頭を出して居た。

見ると、内山はごく靜かに指を動かして、自分のゲエトルのボタンを一つ一つ、丁寧に外し初めた。それが實にのろい動作なのだ、何となく見て居てもどかしい。それよりも彼は一たい何の爲にそんなことをし初めたのだらう、それが第一合點がいかない。そんなに細かく見えるかといふのですか、見えるも見えないもない。今も言ふ通り、我々の目から精々十米突とは距てて居ない。その上、戰爭の最中などには用もないものが、非常にはつきり目に入るものである。(私は、曾て、半町ほど前の聯隊旗の飾り總が、三四寸ほど落ちかかつて、びらびらとしてるのを氣にしなから、突撃したこともある。)

やつとゲエトルとボタンをすつかり外して仕舞つた内山は、此度は靴の紐を丁寧に解く。然も見て居ると、すつかり解き外して、靴から解き外して了ふらしいのだ。尤もそこまでははつきりと見えなかつた。内山の身體の蔭になつたから。が、然うして居たことは後に解つた。一體、靴を脱ぐつもりならば、紐などをすつかり取り外さなくとも、少しゆるめるとか、短靴ならばゆるめなくても脱げる筈なのだ——いや、その時にはやはり編上げ靴であつたが。何しろ今、内山のしであることは、全然無駄なのだ。併し内山はそれを一々綿密にやり終つたものと見える。さうして靴を脱いだ。我々には彼の居ることを意味が、一つも呑込めない。然も靴はか

りでない。靴が終ると靴下を、その爪尖きのところを手の指でつまんで、そろそろと引脱いで居る。同じくそれをも脱ぐつもりなのであらう。

その時、初めて氣がつくと、内山の左の肩のところから血が噴き出して、カアキ色の軍服の上までそれが滲み出し、見る見る、大きく大きく、牡丹の花ほどの斑點から、やがて脊中一面にひろがつた。

や！ やつぱり内山はやられたのだつたか。それにしても内山は何のためにゲエトルや靴や靴下を脱いだらうか。しかし、その疑問は直ぐ解きました。

ちやうど、その時敵の射撃は一層猛烈を加へて來たやうに感しられた。

内山は自分の銃をとり直すと、槓杆を開けるらしかつた。その同じやうな手の動かし方を二度したところを見ると、初めは開かなかつたのを、力を込めてもう一度試みたものと思ふ。それから銃を地面へ置いて、右の手で腰をさぐつて弾盒から弾を一つとり出して居た。

敵の射撃は一層劇しくなつて、私の隣りに居た兵は倒れた。それ以上先を私は精しく述べ得ない。一口に言へば、内山は自分の咽喉へ、銃口を當てがつて、自分の足で銃の引金を引いて、自分で死んだのだ。

敵の攻撃は夕方までつづいた。戦がすんで屍骸を集めた黒田上等兵(この男も後に間もなく戦死した)は、内山の屍と一緒に、わざわざ彼の右の靴やゲエトルを拾つて來た、靴には紐がなかつた。黒田も靴下や靴の紐までは拾つて來なかつた。

兎に角内山のこの行動は、それほど皆の注意をひいたのである。

その晩は、廣い野の果から月が出た。圓い赤い月であつた。その後、冬になつて戦争は當分休戦の状態になつた。さうして水甕の湯槽に入つたりなどして、ゲエトルや、靴や、靴下などをとり外すことが度々あつた。さうして、自分の故郷の事やその外のことを考へる時間も多くなつた。私は靴やゲエトルを外さうとする度毎に、きつと内山の事を思ひ出した。「おれはかうする度に、内山を思ひ出すよ、思ひ出すよ、思ひ出してしかたがないよ。」

と、或るそんな時に私がさう言つた。さうすると、「曹長殿でもありませんか。」

と、平素極くひょうきんで、この男が何か口を利きさへすれば、外の兵はきつと笑ふといふので有名な或る兵が、即座に、併し、いつになく眞面目に答へた。

すると、その場に居合すほどのものは、皆、一度にひひと笑ひ出した。それがいかにも物凄かつたので、一同は互ひにその自分達の聲を氣味悪がつて、互ひの顔を見合せた。

その後、誰言ふとなく、内山はどうも誰か我々のうちの者が打つた弾に當つたのぢやなからうか、でなければあんな倒れ方はしない、と言ひ出した。併し、我々は別に弾の當り具合と人間の倒れ方との關係を、一一研究して見たわけでもないから、又内山の屍骸の傷口をしらべても見なかつたから、それが果して然うであつたかどうかは、誰も知らない。

この話は、K特務曹長（私の當時の隣人）の直話である。私はこの話を、彼から聞いて、こんな話は何とかいふ（名は朧忘れしたが）有名な軍人が左の手で書いたといふ「肉弾」といふやうな書物には出て来ないやうに思ふから、その晩直ぐに就眠前に、彼の話の摘要を自分の手帳に書き留めた。それが前記のものである。

尤も内山一等卒の死は、何處が「兵士の龜鑑であるか」と問はれては、返答に困る。

私は當時（二年前に）この話を、内山の方からとKの方からと、兩方から心理的に書いたらば面白からうと思つた。併し私には今だにそれが出来さうもない。これは別の、同じく従軍して、しかも重傷を負ひながら全癒したといふ珍らしい經歷を持つた人から聞き得た話だが、彼も股を打貫かれてしたたかに出血した時に、何故か、空を見上げたさうだ。砲煙の底の底のどん底に遠く見える太陽は、まるで月のやうに光が鈍かつたが、直ぐ次にはまるで光のない眞黄色でそれが一瞬毎に眞赤になつたり眞黄色になつたりして居るうちに、目が眩んで自分の體が非常な重さになつて來た。それ等の間、彼の頭には、故郷の農村の光景がはつきりと浮び出して、子供の自分自身がそこで曼珠沙華の簇り咲いて居る小川のほとりで手で掬んで水を飲んで遊んで居たさうである。

序に記すが、話に依つて知らるる如く、當時曹長であつたK—は、凱旋すると直ぐ特務曹長に昇進した。さうして志望に依つて砲兵工廠に勤めるやうになつた。その頃は其處で、毎日出來上つて來る小銃は一一實射して見ることに依つて檢

査する役に居た。彼が一日に検査する小銃は甚だ多數で、ちよつと我々の想像以上だといふ事であつた。併しその數字的な明確な數は軍事上に祕密に屬すると、彼は言つて居た。

(大正六年五月「星座」)